

東京学芸大学生物科同窓会ニュース

No.14

東京学芸大学生物科同窓会事務局

2014年9月30日発行

ご挨拶

生物科同窓会の皆様におかれましてはご健勝にお過ごしのことと存じます。今年度は生物科に関わる大学の大きな変化がありました。それは平成27年度から教養系が大幅に削減され、自然科学関連の教室はすべて教育系に統合される、ということです。したがって、教養系のF類自然環境科学専攻の学生募集は今年度から行われません。多くの優れた人材を輩出してきたF類(旧J類)がなくなるのは非常に残念です。結果として、A類理科の定員は65名から85名に増え、B類理科の定員は35名から45名に増えます。この定員枠の拡大により、優秀な人材の確保が我々教員の課題となります。もしお近くに優秀で教員志望の学生がいましたら、学芸大理科を受験するよう是非ともお勧めください。よろしくお願いいたします。

ところで、卒業生の皆様にとって、学芸大の思い出の中で卒論または修論が占める比重はとて高いのではないのでしょうか。卒論と修論は、単に科学的な方法や考え方を学ぶだけでなく、日々の実験により自己の探究心を高め、論文作成により自己表現をする機会でもあります。社会に出ていらっしゃる卒業生の皆様はお分かりのように、さまざまな職場は言わば自己表現の場であるとも言えます。現役の学生の皆さんには、卒論・修論という貴重な機会と真摯に向き合い、自己表現達成の喜びを味わっていただきたいと思っています。

末筆ながら、卒業生の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈りいたします。とりわけ、世の中の価値基準に惑わされず、ご自身のやりたいことを精一杯やり、掛け替えのない充実した人生をお送りになられますよう心よりお祈りいたします。

(平成26年度生命科学分野主任 飯田 秀利)

◆平成26年度 生物科同窓会 「企画講演」のお知らせ

今年も同窓会総会に先立って、恒例の生物科同窓会企画講演会を下記の通り開催いたします。

当日は学園祭である「小金井祭」の前日、大学企画の「ホームカミングデー」に当たります。今年の講演者は、旧教員の武田 幸作先生です。

本講演は一般公開で参加費無料です。多くの同窓生、大学生及び一般市民のご参加をお待ちしております。

花の色の青色発現の仕組みについて

講師：東京学芸大学名誉教授 武田 幸作先生

日時：平成26年11月1日(土) 13:00~14:00

場所：東京学芸大学自然科学系研究棟1号館
(旧称自然館)2階 生物学第一実験室
(CN206室)

講演要旨

この分野の研究(花色変異についての研究)がスタートしたのは今から100年ほど前のことで、「赤色のバラの色素と同じ色素でありながらヤグルマギクでは何故青色なのか」という問題であった。これまでに多

くの研究がなされてきていて、最近では変異の仕組みがかなり明らかにされてきている。

ここでは、ヤグルマギク、ツユクサ、アジサイなどの花の青色、ヒスイカズラの花の神秘的ともいえる青緑色などの発現の仕組みについてこれまでに明らかにされてきていることを紹介したい。

武田先生のご経歴

東京教育大学理学部卒業、同大学院理学研究科修士課程、博士課程修了、理学博士。聖マリアンナ医科大学講師、助教授を経て、昭和54年東京学芸大学教授、文部省在外研究員(英国・レディング大学、ドイツ・フライブルグ大学)。平成8年~平成12年に東京学芸大学第3部部長を歴任される。平成12年東京学芸大学名誉教授。その後、筑波実験植物園客員研究員、東洋大学生命科学部客員教授を経て現在、理化学研究所客員研究員

(なお、この会場で引き続き今年度の「生物科同窓会総会」を開きますので、生物科同窓生の方はそのままお残り下さい。)

◆平成 26 年度 生物科同窓会総会のお知らせ

平成 26 年度生物科同窓会総会を、前記「企画講演会」の後に同会場で開催いたします。重要な議題がありますので、多くの会員のご出席をお願いいたします。

日時：平成 26 年 11 月 1 日(土) 14：00～15：00

場所：東京学芸大学自然科学系研究棟 1 号館(旧称自然館)
2 階 生物学第一実験室 (CN206 室)

議題：

- ①平成 25 年度決算報告
- ②平成 26 年度中間報告
- ③平成 26 年度庶務報告(事業報告など)
- ④平成 27 年度予算案
- ⑤平成 27 年度事業計画(企画講演会、自然観察会等)
- ⑥その他

◆生物科紙面同窓会

生物科同窓生の「今」の声をお届けします。この紙面同窓会で情報交換が行なわれ、同窓の繋がりがますます深まれば幸いです。今回は、昨年原稿を依頼しなかった同窓生で、平成 25～28 年度の会費を納められている会員に依頼しました。

【旧教員】

●大学を退官して 14 年、時の流れの早いのに驚いています。6 年ほど前から研究書、「植物色素フラボノイド」(文一出版)の編著にかかわる機会があり、昨年ようやく出版することができました。もう少し研究のまとめの取り組みをしたいと思っており、6 月末、久しぶりにイギリスのキュー植物園、レディング大学を訪れてきたところです。いろいろな機会に卒業生の活躍を知り、励まされています。「K.T.」

【3 期】

●生物科同窓会の活動のご通知を頂く度、参加できる日を楽しみにしておりましたが、日常生活に追われる日々、一度も参加することができませんでした。

八十を過ぎた今、井上・小林教授のもと、霧ヶ峰での実習のことなど、昨日のこのように思い出しております。

これからの皆様のご活躍と生物科同窓会のご発展を心からお祈り申し上げます。

「Y.Y.：昭和 30 年卒」

●高校時代に顕微鏡で生物を観察する授業が面白く、学芸大大泉分校生物科に進学し、小林・井上両先生の指導を受けました。荒川区の小学校に 20 年勤めて退職し、その後埼玉県の高キングクラブの仲間と名所旧跡巡りをしています。

また埼玉支部の総会で大泉の生物部で一緒だった蝶の研究で有名な松田邦夫氏と会えるのが楽しみで、当時の大石生物部長の話などをして懐かしんでいます。

「N.K.：昭和 30 年卒」

●ここに一枚の写真がある。六十年も前の小さなスナップ写真で、劣化が進み、もはや人の顔の判別も難しい。

記憶をたどればこの写真は、昭和二十六年、小金井分校の時の私達生物科の一年生が、逗子海岸に海浜生物の観察に出かけたときの写真で、今となっては、当時を知る貴重な一枚である。

ただ、今この写真を見ても、名前の判る者はわずか二～三名である。

お互いに大切にしよう。「同期の桜」を。

「S.K.：昭和 30 年卒」

【6 期】

●母校の東京学芸大学へは、昭和 50 年度の 1 年間、東京都教育研究生として、都立教育研究所特別活動研究室に籍を置き、1 年間、心理学佐藤正教授(附属学校部長)の部屋で、ご指導をいただきながら、学生さんたちとも授業を受けたなつかしい思い出があります。

今、日の出町の自然豊かな環境で生活、梅雨期には、庭の池にモリアオガエルたくさん卵を産卵します。

すぐ近くに、生物学の井上巖教授が住んでいらしたことも、今はなつかしい思い出です。

「T.N.：昭和 33 年卒」

【7 期】

●停年退職後十九年が経過し、来年は八十歳となります。無病とはいきませんが何とか元気に過ごしております。五十九年前の昭和三十年四月、小金井の木造校舎で一年先輩の諸兄と同期の仲間達と生物科での生活が始まったのをついこの間のように思い出されませぬ。ご指導をいただいた諸先生もすでになく、思い出にふける今日この頃です。後輩の諸君のご活躍を楽しみにしております。「T.A.：昭和 34 年卒」

●大変ご無沙汰いたしております。現在はNHK学園の野外講座を 2 コマ担当し、単に植物の名前の紹介だけでなく、自然の美しさ、ふしぎさの「からくり」を探ることを心がけています。また、奥多摩町の依託で、野山歩きのガイドをしています。

私の学生時代の恩師小林萬寿男先生が「生物はあまりばらばらに細かく見ると、生物は見えなくなります。常に全体的にとらえるよう心がけなさい」と言われたお言葉が忘れられません。皆様お元気で。

「K.H.：昭和 34 年卒」

【11期】

●昨年「歳」だからと、農大講師を辞めた。早速、故川崎次男先生と夢物語をしたアメリカへ行き、G キャンيونやヨセミテ国立公園などを巡った。今年はスイス行の予定をたてた直後に首都大学東京から依頼があり、様々ないきさつなどで断り切れず、非常勤講師をすることになった。早く後任を捜し、譲るつもりだ。それでも、アルプスへは行き、多くの昆虫や高山植物の写真を撮ってきた。整理が楽しみ？だ。

「R.A. : 昭和 38 年卒」

【18期】

●同窓生の皆様お元気ですか？私は故郷の山にかかわりながら、後期高齢者へ向かって着実に時を刻んでいます。それにしてもこれからの世の中心配ですね。文化の質が変です。個体維持、種族維持が将来にわたってしっかりできる文化でしょうか。世の中を作っている大人の力、これからの世の中を作る教育の力が問われている気がします。

今後とも微力ながら、両方に意識してかかわろうと考えている今日この頃です。「T.K. : 昭和 45 年卒」

●生物科を卒業してから早何十年！覚えているのは(超)古い教室・研究室のみですが、毎年同窓会ニュースを頂くと、昔の思い出が蘇えます。元気だった体もガタがくるようになり、こんな筈では無かったのところがっかりの日々ですが、それでも野外実習・活動で行ったところに、もう一度行ってみたいと思う気持ちがあります。遠いので実現しないのですが、「園」と名がつく所になるべく行くようにしています。

「M.T. : 昭和 45 年卒」

【19期】

●定年退職後 6 年目になります。今年も若い先生方の育成の仕事をお願いしています。失敗や悩みを重ねて成長していく姿に感動しています。

退職後のOB会にも初参加しました。自然鑑賞や施設見学等、初めての体験も多く、企画者の英知に感動しています。

新たな出会いに感謝、お世話になった方々へ感謝、そして、自分の健康にも感謝の日々です。

「M.H. : 昭和 46 年卒」

●本年 3 月、千葉県立保健医療大学を定年退任しました。東京都立千歳丘高校を皮切りに高校教員として 14 年、短期大学・大学教員として 27 年を過ごしました。思い返せば、随分いろいろなことをやってきたようでもあり、学生時代がついこの間のようにもありといった心境です。その後、後任者が未決定といった事情から保健医療大には週 2 日生物学の授業に出かけ、また、週 1 日は青山学院大学で初等理科教育法を担当するなど、結局は在職時と同様な日程で行動しています。

昨年の総会で、岡崎前会長の後任として会長をお引き受けすることになりました。余りにも荷の重いことではありますが、学芸大諸先生方、同窓生の方々のご協力を賜り、職務に励みますので、何卒、よろしくお願いいたします。「K.H. : 昭和 46 年卒」

【22期】

●東京学芸大学大学院では、岡崎先生、片山先生、真山先生他の先生方に大変お世話になりました。その後、兵庫教育大学連合大学院で学位(博士、学校教育学)を取得しました。現在、川崎市立看護短期大学で生物と環境、桐蔭横浜大学で理科教育(生物分野)を担当しております。昨年、オーム社より「解くコツがわかる小学校教員採用試験理科問題集」を出版しました。教員を目指す皆様のお役に立てればと存じます。

「J. I. : 昭和 49 年卒」

【26期】

●担任を持っている時の私は、教育を野外に求めるいわゆる山川先生でした。管理職になってからは、生き物係、子供たちは、珍しい虫や花を見つけると私のところに持って来ます。校長室の前に、自然コーナーを作って時々動植物や星の動き等の自然現象を紹介してきました。途中からはホームページに自然がいっぱいとして掲載して来ました。紫波町立赤沢小学校ホームページ過去ログH25 自然をぜひご覧ください。3 月で定年退職しました。現在公民館の社会教育指導員をしています。

「K.H. : 昭和 53 年卒」

【27期】

●小林弘研究室の先輩と結婚したので、大学生時代と同じ様な感じで生活しております。珪藻の話題もしばしばですが、一步外に出ると、毎日の様に自然観察会です。現在玄関には、ルドベキア・タカオがまっさかりです。

「K.N. : 昭和 54 年卒」

【34期】

●高等学校に勤務しています。生徒が授業中にスマホをいじる、なかば中毒のような生徒が目立つようになりました。そこで、生徒指導係としてこの事態を改善しようと、各教室にスマホ入れなる小箱を設け、毎時間授業開始前にスマホを提出させて授業が終わったら返すという取り組みをこの 4 月から始めました。結果は意外にうまくいき、スマホをいじる生徒は皆無になりました。お試しください。

「K.S. : 昭和 61 年卒」

【46期】

●教職から離れて約 10 年になりました。ちょっとしたことがきっかけで起業してそろそろ 10 年。

賃金を頂戴する側から支払う側への転換は、まさに 180 度違った世界を見せてくれています。

新しい分野の業務も開始しました。試行錯誤の繰り返しは、なぜだか学生時代を思い出します。

「M.K.：平成 10 年卒」

【58 期】

● 4 月より公募で東京農業大学農学部教職・学術情報課程の教授に就任しました。主として中学高校の理科

教員を目指す学生の指導を行っています。キャンパスは厚木市の自然豊かな環境にあり、身近に生物教材が確保できる利点があります。学生達も自然や生き物大好き人間が多く、教育と研究に刺激を受けながら充実した毎日を過ごしています。厚木キャンパスにお越しの際は是非お立ち寄りください。

「H. N.：平成 22 年院卒」

◆平成 25 年度企画講演会報告

フィールドでいきものたちの声を聴こう
「進化の島ガラパゴスで植物を研究する」

横浜国立大学教育人間科学部理科教育講座
准教授 倉田 薫子先生

ガラパゴスについて

ガラパゴス諸島には非常に顕著な特徴がある。一つは、大陸から離れた海洋島で、一度も大陸とつながったことがないこと。その島に入ってくる生物は限られ、海を渡るか、風で飛んでくるか、波に流されてくるかしかない。二つ目は島の環境が過酷で、隔離された空間がたくさんあること。そのような環境が種の進化を促進するといわれている。

ガラパゴス諸島へ外部から行く研究者は、必ずチャールズ・ダーウィン研究所の客員研究員として派遣されているという形でなければ研究許可は下りない。国立公園と打ち合わせ後研究許可申請をすると、渡航の許可、サンプル採集許可、サンプルの島間移動許可の書類を作ってくれる。許可後、ダーウィン研究所が船と助手、安全管理や検疫等々を手配してくれ、やっと調査ができることになる。

ガラパゴス諸島には島が 130 程度ある。人が住んでいるのはサンタクルス島（約 2 万人）、サンクリストバル島（約 5000 人）、イサベラ島（約 2000 人）、フロレアナ島（約 100 人）の 4 つの島で、全面積の 3 % でしかなく、97%が国立公園である。その 4 島間は船が毎日運航されているので移動はむずかしくないが、他の離島へ行くときにはすべて船をチャーターしなくてはならず、その上検疫は非常に厳しく、特にフェルナンディナ島は今プライオリティが一番高くて、許可がまずほとんど下りないくらいに守られている。



講演中の倉田先生

ガラパゴスでの研究

キク科の固有種・スカレシアは、舌状花を持つものと筒状花しか持たないもの等種分化が激しく、諸島内で 1 属 15 種程度に分化している。また、同様の固有属・レコカルプスもサンクリストバル島やフロレアナ島で葉の形がだいぶ違い、種分化を起こしている例として知られている。

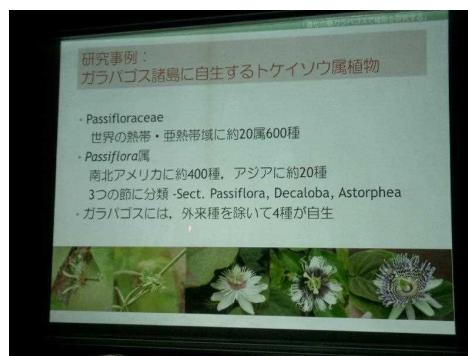
このような植物の集団ごとの分化は、他の植物でも同じ現象が起きているのではないかと完全に分かれてしまう前の段階を検出することが可能であれば、その分かれていくいわゆる要因がわかるのではないかとというのが疑問点で、出発点である。植物が、海洋島にどのような形でやってきて、どのように固有種が誕生したのか、また、それらが群島効果を経てどのように種内分化を起こしてきたのか、という道筋を形態的・遺伝的に探るといのが大きな目的となった。

トケイソウ植物は、世界の熱帯・亜熱帯に約 20 属 600 種自生してる。中でも *Passiflora* (トケイソウ) 属は南北アメリカに分布の中心があつて、アジアには少ししかない。

Passiflora 属は 3 つのセクション (*Pssiflora*, *Decaloba*, *Astorphea*) に分かれていて、その中でガラ

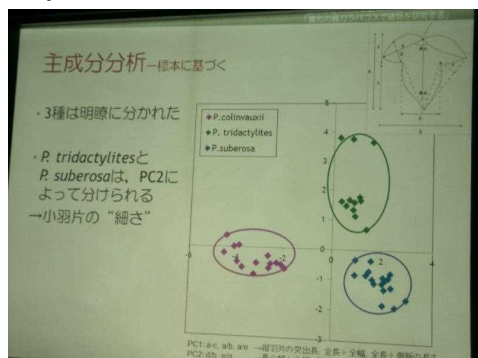


聞き入る受講者



世界のトケイソウ類

パゴスには外来種を除いて4種類が自生している。ガラパゴスの固有種だと思われる *P. colinvauxii* は明らかに葉の形が違う。それから *P. foetida* というのは節自体が違って、派手な花をつける。しかし、*P. suberosa* と *P. tridactylites* の2種については、原記載はガラパゴスのもので *P. tridactylites* が書かれているが、分布状態の記載がなかったり、*P. suberosa* は広域分布・南米大陸にも分布しているが、「葉の形状は多様性に富む」ことだけで、花や果実については記載がない。



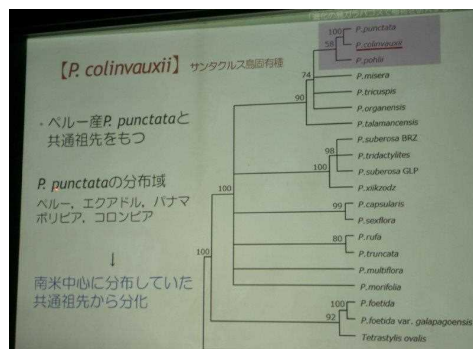
少羽片の細さによる分析

そこで、まず葉の形を定量的に示して分類を再検討した。すると、この3種は明瞭に分けることができた。特に、*P. tridactylites* と *P. suberosa* については「小羽片の細さ」で見ると明らかに分けられた。しかし、実際フィールドで見るとこんな典型的なものだけではない。例えばサイズで見ると、サンタクルス島とサンクリストバル島とでは縦長は4倍くらいの差があり、その原因は栄養状態なのか、地質の成立年代の差なのか、または水分とか日照条件なのか等推測することしかできない。また、葉の形も混在し、いわゆる典型的な *P. tridactylites* と *P. suberosa* とは葉の形態で区別できるが、その中間形については段階的に変わっている可能性もあり、分類を不可能にしていることも考えられる。標本の形態分類は可能だが、実際は異なる。では、これをどうするか?ということになる。

次に出てくるのが DNA の塩基を用いた種判別とか、系統的な位置づけの問題である。

これに関しては先行研究が2006年にあり、DNAの3つの領域を合わせて書いた系統樹になっている。ガラパゴスのものの位置づけは、1つが *P. suberosa* でブラジル産のものを使っていた。次いで *P. foetida* もブラジル産のものだった。ということは、この系統樹にガラパゴスのサンプルデータを入れてやれば、位置づけがはっきりすることになる。その結果、4種類・*P. colinvauxii*、*P. tridactylites*、*P. suberosa* のガラパゴスのものと *P. foetida* のガラパゴスのものが3つのクレードに分かれることがわかった。

まず、サンタクルス島の固有種 *P. colinvauxii* は、中米の南部から南米にかけてが原産であるということもわかった。おそらく南米大陸起源のものがガラパゴスに何らかの方法で入ってきて、その集団だけで進



サンタクルス島の固有種

化して1つの *P. colinvauxii* という種として独立したとすることができる。

2つ目、*P. suberosa* と *P. tridactylites* については、ブラジル産の *P. suberosa* と共通祖先をもっていることがわかった。しかも、ブラジル〜ガラパゴスは相当な距離があるにもかかわらず、1塩基の違いもなかった。ということは種が分化しているという可能性は非常に低い。しかも、この2つは同種の可能性があるということになった。しかし、花を見ると、構造は同じだけれど、サンタクルス島の *P. suberosa* の花柱の長さがピンタとエスパニョラでは非常に長くなっている。花に関してはまだ液浸サンプルに手が付けていないので、しっかり調査してもっときれいにまとめたいと考えている。

最後に *P. foetida* で、ブラジル産の *P. foetida* と100%の確率で共通祖先を持つが、ガラパゴスの *P. foetida* はかなり遺伝的に遠うということもわかった。ということは、現在、*P. foetida* に統合されているが、これを元に戻して *P. foetida* var. *galapagoensis* として固有変種扱いをするのがふさわしいと提案したい、というところで止まっている。

これまでをまとめると、形態の解析は実際非常に難しくなっているので、花や果実などの分類形質を検討する必要がある。それから、分子系統からはっきりといえることは、種の由来(南米から来た...)についてだが、もう少し解像度をあげて分析する必要があると考えている。

以上のほか、動物ではリクイグアナ、マネシツグミ、植物ではサボテン類、ツツジ科、ボタン類、トマト、オオバコ等について、また、調査に関することからゴミの問題等々まで大変興味ある話が続いた。



花と葉の形態が不一致?

(興味のある方は Web で「ガラパゴスだより」を検索してみてください。)

~~~~~

講演後、質問が多く出された。系統に関係のあることをあげると、「塩基配列の比較は、DNA の何を比較さ

れたのか」に対して、「系統樹は 2 つを組み合わせであり、1 つは核の DNA、もう 1 つは葉緑体の DNA である。それらの Junk DNA (ガラタ DNA) を使った」ということだった。(編集: 青木 良)

## ◆追悼文

長年、生物科の学生をご指導くださった堤千里先生が、昨年ご逝去されました。本号では先生の下で学ばれた久保田ご夫妻に追悼文を綴っていただきました。

### 堤 千里先生を偲んで

久保田 恵子 (25 期・昭和 52 年卒)

久保田 敏 (26 期・昭和 53 年卒)



昭和 52 年春、笑顔の堤先生と卒業生

堤千里先生の研究室(8研)で私たちは、先生から研究に関することはもちろん、様々なことを教えていただきました。また奥多摩の御岳、古里や菅平合宿など昆虫採集をご一緒させていただいたことなどもとても懐かしく思い出されます。

研究室での思い出はいろいろありますが、堤研ならではのというとなんといっても卒論での先生との長時間のディスカッションだと思います。帰り支度をして下駄箱で靴を履いたとたんのちょっとしたやりとりが、気がついたら終電の時間近くまでになっていたなどということを経験した人も一人や二人ではないはずです。

先生は、未熟な私たち学生に対しても、いつも敬意を持ち、親身になって接して下さいましたが、このディスカッションも先生のお人柄をよく表しているものと思います。ご自身の研究もあってお忙しい中、貴重な時間を私たちのために割いてくださって、本当に頭が下がる思いです。自分たちも教職についてみて今更ながらわかるのですが、絶えず相手に敬意を持って接することは、決して易しいことではありません。さらに堤先生は物腰も上品で、まさに‘ジェントルマン’

とは先生のような方を指すのだと思いますが、なかなか真似できるものではありません。

最近、先生のご遺品の整理を、お手伝いする機会があり、先生の遺された手帳の中を覗かせていただきました。(きっとあの世で先生はお怒りだと思います)。手帳はどのページも先生の几帳面な字で埋め尽くされていました。スケジュール以外に時にそれは健康の事、異なる分野の学問、日用品の記述とまさしく多種多様で、その徹底したメモに驚かされました。

思い起こせば、当時から私たちが何か目新しいものを見て報告すると、先生は「どこで見ましたか、どんな様子でしたか。」と少年のように目を輝かせてお聞きになりましたが、先生は人並み外れた好奇心をお持ちで、さらに何事であってもとことん探究する日々をお過ごしであったことが、改めてわかりました。

先生は、1956年に東京教育大学理学部動物学科を卒業され、翌年国立予防衛生研究所衛生昆虫部に、1973年に東京学芸大学に赴任され、1997年に退官されるまでイエバエの日周性、チャタテムシの分類、学芸大でのヒトツモンイシノミの配偶行動などを研究されてきました。そして退官されてからもいろいろな昆虫、時にカエルなどにも学問的な興味を持ち、日常のテーマとされてきました。先生が、こうした昆虫研究の集大成として 2004 年に書かれた『陸の覇者としての昆虫(翔文社)』は、昆虫の世界への先生の執念が感じられる著作といえます。昆虫はなぜ陸の覇者と成り得たかについて、精緻な議論をもとにした高度に専門的な内容を含んでいると同時に、先生が日頃の昆虫観察を通して、疑問に感じたこと、まさに昆虫はいつも身近にあり、そこに解くべき先生のいう『日常の驚異』が無限に広がっていることを教えてくれます。あとがきでは先生が、教育現場にいる人たちが昆虫の世界を通して生命への理解と畏敬をより深めてほしいとしてこの本を書かれたこともわかります。堤研の卒業生として先生のメッセージを、これからもきちんと受け止めていきたいと思います。

私ごとで恐縮ですが、私たちは堤研で出会い、結婚もできましたし、ここでスタートさせたアリとの関わりは、今夏、日本産アリ類図鑑(久保田 敏ほか共著)の刊行という形にまでこぎつけることができました。惜しむらくは堤先生に見ていただき、お礼を言えなかったことはとても残念です。それにもまして私たちが、先生と一緒に採集に行ったり、昆虫の話をしったりすることが出来ないと思うと無性に寂しくなります。このような思いは、研究室の多くの卒業生もきっとそ



れぞれお持ちだと思えます。

先生が、昨年10月末に、突然倒れられて亡くなる直前まで研究をされていたご自宅の部屋を見せていただきましたが、最後まで昆虫の研究を続けながら、旅立

たれたことは先生にとって幸せだったのかもしれない。今はせめてそんなふうに考えています。

先生のご冥福をお祈りいたします。

## ◆平成25年度 総会の報告

平成25年度総会が昨年11月24日(土)午後2時～3時に東京学芸大学自然科学研究棟(旧自然館)2階生物学第一実験室で開催されました。そして、次の議題について審議し、承認もしくは議決されました。

- ①庶務報告(活動報告)
- ②会計報告(平成24年決算報告、25年度中間報告、会計監査報告)
- ③平成26年度予算案
- ④平成26年度活動計画(企画講演会、自然観察会)

企画講演会の演者として本学名誉教授の武田耕作先生にお願いすることにしました。また、自然観察会の講師に東京学芸大学の高森久樹准教授(理科教員高度支援

センター)(昆虫)、真山茂樹教授(生命科学分野)(植物)にお願いすることとし、観察会の期日は大学の教員研修と重ならない5月に実施することとした。

⑤役員の改選を行い、25年10月22日～28年10月22日までの役員として、次の方々を選任された。

会長 橋本 健一(19期)

副会長 小林 富美恵(24期)、石井 雅幸(29期)

庶務 吉野 正巳(24期)、小境 久美子(47期)、  
傳幸 朝香(40期)

会計 岩間 淳子(22期)、真山 茂樹(26期)

会計監査 岩元 明敏(本学)、笠原 秀浩(47期)

編集 青木 良(11期)、岡崎 恵視(13期)、  
横山 正(17期)、仁科 りか(32期)

⑥ その他

## ◆平成26年度 自然観察会報告

恒例のキャンパス内「自然観察会」が5月17日(土)午後1時から高森久樹先生(昆虫担当、東京学芸大学准教授、理科教員高度支援センター)と真山茂樹先生(植物担当、同大学教授、生命科学分野)を講師として開かれました。今年は好天に恵まれ、参加者も30名近くになりました。

講義棟の広場を出発して農場を目指しましたが、目に触れる物すべてに、興味深い先生方の解説があり、2時間でやっと100mしか移動できませんでした。今年は、参加したお二人の学生に感想文を書いてもらいました。紙面の都合で全部を載せることができませんでしたが、その一部を紹介します。

### ●自然観察会の感想

東京学芸大学の構内で、たくさんの植物や動物をよく見かけてはいましたが、その種類や生態について考える機会は今まであまりありませんでした。動植物があまりにたくさんあるので、一つ一つを取り出して考えることが少なかったせいかもしれません。今回の観察会で、初めて間近で観察した植物も動物もたくさんありました。

観察会を通して、生物科の大先輩の方々から貴重なお話をたくさんいただき、新しい発見ばかりでした。先生方は、一種類の植物、動物について、15分も20分も語る事ができて、その知識の深さにおどろきました。植物や動物を見ただけで、あれほどその生態や特徴、そのほかの面白い豆知識などを話すことができたなら、きっと外を歩いているだけでも楽しいだろうなと思いました。

たくさんの植物、動物に触れた観察会でしたが、そ



こで初めて経験したことがいくつかありました。中でも、特に印象に残っているのは、女王バチを観察したことと、どんぐりを食べたことです。

どんぐりを食べることは、初めてのことでした。少し渋くて、ほんのり甘いような味で、とても新鮮でした。普段口にしないものを食べてみるというのは、少し抵抗がありましたが、面白い体験ができてよかったです。

この会に参加して、驚いたり、感慨深い気持ちになったり、初めての経験をしたり、とても充実した時間を過ごすことができました。たくさんの面白いお話をいただきました先生方に感謝いたします。

「B12-2314 菊池 真衣」

### ●自然観察会の感想

先日の観察会に参加させていただき、ありがとうございました。生物科の先輩方は、豊富な知識をお持ちで、それを生き生きとお話する姿を見て、自分もこのくらい知識がついてくれば実験や観察がもっと面白く

なってくるのだらうと思いました。知識や多くの経験を積むことの大切さ、また、そういった知識・経験を活かす、表現できるすごさを感じたことが印象に残っています。

観察会で一番印象に残っているのはスズメバチを捕獲したことです。普段蜂を見かけたらすぐに逃げるので、こんなにまじまじと見る機会は初めてで、非常に迫力がありました。瓶を伝わってブルブル震えている蜂の羽音の振動や、瓶を顎でガチガチさせているあの感覚は二度と忘れないうと思いました。

また葉の形状や、植物が発する匂いなどから、種子散布の戦略や、何科の植物などを当てられること、食べられる木の実を見分けたり、とりもちのように利用の仕方を知っておいたりすることは、先人の知恵を理解することにも繋がりますし、野外学習に行った時など子供たちに楽しい思い出になるのだらうと思いました。少なくとも大学生の自分が面白く印象に残ってい

るので、子供たちは楽しんでくれると思いました。

自分も将来教員になった時に、今回のように子供たちと観察をして、実感を伴った授業を展開できるようになりたいです。そのためには、まず豊富な知識と経験、虫の捕獲や花や木の実などの処理の仕方を学んでいきたいです。貴重な体験をありがとうございました。

「A12-0311 遠藤 拓」



## ◆大学での出来事

大学は村松前学長の後、平成 26 年 4 月より新学長に出口利定先生（臨床心理学分野）が就任され新体制のもとスタートいたしました。本年度も人事面で変化がありました。平成 24 年 3 月に御退職された小川 潔先生の後任として平成 26 年 4 月 1 日、山本昭範先生が環境科学分野の講師として着任されました。所属分野は環境科学、教室は環境教育教室です。先生の御専門は生態系生態学で、自然生態系や農業生態系における物質循環を明らかにする研究をされています。山本先生には小川先生と同様に生物科の学生の卒研指導もご担

当いただきます。生物学教室の出来事として、平成 25 年ご逝去されました生物科第 3 期卒業の佐藤 敏氏のご家族より、「原色牧野植物大図鑑」を始めとした多数の貴重な蔵書を生物学教室に寄贈していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

スコットランドのエジンバラにて在外研究されていた岩元明敏先生が 2014 年 3 月帰国されました。分野内の人事では、飯田秀利先生が附属小金井小学校の校長、2 期（4 年）の任期を終えられ、本年 4 月から大学に戻られました。また、4 月から狩野賢司先生が附属大泉小学校の校長となりました。原田和雄先生は、附属高等学校の校長として今年 2 期目を迎えられ、ご活躍中です。（庶務：吉野 正巳）

## ◆卒業論文発表会・修士論文審査会（公開）のお知らせ

平成 26 年度の卒業論文発表会は 2015 年 2 月 7 日（土）、8 日（日）午前 9 時から行われます。また 2 月 8 日（日）午後 1 時より修士論文審査会を行います。公開審査ですのでどなたでも参加できます。後輩達の研究成果を是非お聞きください。審査会ではありますがどうぞ遠慮なく質問、コメント等していただいて学びの場となれば幸いです。研究室ごとの卒論発表時間等の詳細、場所の変更等がある場合は、来年 1 月に生物科同窓会のホームページにてお知らせいたします。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~biology/seibutsuka/dosokai.htm>

（「生物科同窓会」で、キーワード検索ができます。）

~~~~~

◆会費納入のお願い

一昨年度より、平成 25 年度～28 年度の会費を収め

ていただいております。まだ、収めていない方は、4 年分の会費として 2500 円をご送金ください。なお、郵便振替用紙は昨年お送りしています（経費節約のため 4 年に 1 回同封しています）が、郵便局に備え付けのものを利用して頂いても結構です。

口座番号：00170-1-21830

加入者名：東京学芸大学生物科同窓会

電話/FAX 042-329-7521

（庶務：吉野 正巳）

E-mail: mayama@u-gakugei.ac.jp（会計：真山 茂樹）

◆編集後記

本誌の編集には毎年多くの方々にご協力、ご援助を頂き、大変感謝しております。

自然観察会では、今年度お二人の学生に感想文をお願いしました。紙面の都合で全部を紹介できなかったのは残念ですが、観察会の様子はおわかりいただけたのではないかと思います。（編集：横山 正）